

# 伊那谷スケッチ

## ～自然と文化を巡るふるさと再発見～第45回

前島久美



冬の東京研修で毎年使っているマンスリードミトリーが希望の期日から使えなかつたので、ここ2週間ほど曙橋のカプセルホテルに間借りしている。防衛省や中央大学の法学院が目と鼻の立地だ。道場がある代々木までは片道徒歩40分。ウォームアップには悪くない距離だ。カプセルホテルで充てがわれるプライベートスペースは2ベットの1段で、私のいるフロアは最大28人収容が可能とある。平日はややゆとりがあるが、週末ともなると満室となる。その様子はお蚕様の上族器さらがらだ。そのお客様のほとんどが外国人だ。特に英語圏の人たちは押し黙る感じがなく、顔を合わせたら気軽に声をかける感じが軽やかで過ごしやすい。毎日シーツの取り替えをしてくれるエキゾチックなお姉さん達はインド人かパキスタン人か、東京もずいぶん多国籍になったな、と思う。

食事は毎朝自家製米を稽古前に炊いて、帰ってきてからおにぎりにして1日の食事分を確保する。おかげは、今のところ派手にキッチンが使えないで納豆やお豆腐、アボガドをサラダにしたりする「切るだけ簡単メニュー」ですませている。バナナは欠かさない。ヨーグルトにきな粉やバナナをトッピングして一緒に頂く。近くの商店街に中国系の八百屋さんがあってそこのバナナを試しにひとざる買ってみた。しかし味がイマイチ。やや渋みが残る感じがする。そこでコンビニの「エクアドルで日本人が作ったバナナ」というのを買って食べてみたところ美味しかつたので、好んでそれを購入している。

パッケージを見た時に「農家さんが付けた名前ではないな」と思つたらやっぱりそうで、農家さ

んと提携したコンビニがパッケージを作ったらしい。農家さんは基本的に「作った」という表現は使わない印象だ。バナナ本体にはちゃんと「●●農園が育てた」と小さなシールが張ってあってホッとした。

(2020/01/31 記)

## 右馬允築 100 年記念文化イベント（2019/12/22 実施）

「大鹿村上蔵まちなみ×旅舎右馬允たてもの見学会」を終えて

2019年は実家の旅舎右馬允が築100年にあたり「みどりに包まれて手打うどん×ヨガ」や「紅葉を愛でる新そば×ヨガ」といったイベントを企画してきた。家族で役割を分担できるため、定員に満たなければ中止にできる気楽さで企画を立てたがお陰さまでどの回も定員に達した。12月には飯田市歴史研究所の研究員福村任生（みづき）さんの力を借りし、彼が主催する建築史ゼミの一環として表題の見学会の実施にこぎ着けた。（図1）参加者13名（まちなみ見学+3名）松本や北信地域から個人で参加してくださった方は「建築やまちなみを視点にした見学会が目新しい」と参加理由を伝えてくれた。地域のありようを見ていく糸口の開拓として年末にふさわしい見学会となったのではないだろうか。

## 上蔵は『中世』までさかのぼる事が確実な集落！

上蔵集落のシンボル福德寺では、福村さんから文献も引用して詳しく解説があった。信頼のおける最初の上蔵の記録は、福德寺仏像台座にある1444年の墨書で、「此御堂立はしめ八平地二年申つたへて候さんことのさいしき二て候 下略」という記録がある。これを平治2とすると、1160年が御堂建立の年と考えられる。また、仏像後背の墨書には「うわす住人さこんの二郎」という存在が確認される。（『大鹿村史』より）「うわす」といのは上蔵。すなわち上蔵の住人のさこんの二郎さんが寄進したのだろうか。

村の古老たちから「大河原」や「鹿塩」は南北朝からの由緒ある地名と聞かされて来たが、文献上は根拠がないらしい。一方で上蔵の長老は、集落のことを「上蔵村」という言葉で時折表現する。大河原や鹿塩には村という機能はつかないが、上蔵にはそれがつくことを思うと中世までさかのぼる事ができると言うのは感覚的にうなずける。福村さんは他にも福德寺の建物仕様についても時代背景を読み取れるといった専門的な解説をされていたが、建物を見る目が備わっていない私は違いがいまいちわからない。経験不足を感じずにはいられなかった。

福德寺は「県内最古級」と言われ、鎌倉時代に建てられたというのが一般的な解説だが、ご本尊の台座に示される伝承によると現在の福德寺は再建されたものでそれ以前から御堂はあったのではないかと推察されているようだ。時代としては南北朝。つまり宗良親王が来る前から御堂はあり、もしかしたら当時、比叡山のトップだった宗良親王が再建したのかもしれない。

福德寺の解説の後、上蔵地区をそぞろ歩きながら集荷所を経由して、家の門の2階が蚕室になっている住宅に向かった。（図2）ここは下見の時に福村さんの感性を刺激したもので、やはり参加者も珍しがった。明治期に建てられたもので家主の奥様が主にお姑さんが使っていた当時のことを振りお話ししてくださった。

また「上戸地区の蔵の作りが一般的なものより一回り大きい」とゼミ生から指摘があった。地元のひとから「昔は6表は備蓄していた」ということを聞いているが、山間地帯ということもあり飢饉や災害に備えて多めに備蓄をする必要性があったからかもしれない。



## 様式として珍しい右馬允の建物

右馬允のたてものは旧家屋が家事で消失し、大正8年に36代目当主の隆俊（たかとし）が再建したもので素人ながら設計を手がけている。今回、参加者の中に建築士の方が2人いらしてメジャーをもちながら「ここは長い」とか「この仕様はめずらしい」とか、ぶつぶつ言いながらながらご覧になっていたのが印象的だった。（図3）プロの大工さんであればしないような仕様が随所に見られるという。福村さんによれば江戸時代までの日本の住宅は平屋建てが基本で、二階はあっても屋根裏の粗末な部屋というつくりが一般だったという。しかし大正時代に建てられたこの住宅は、二階に立派な客座敷きが設けられ、またそれらの部屋の横には、透明なガラスで覆われた光に溢れた廊下が作られている。これらの特徴は全体として近代的な印象を与えるもので、近世までの民家造りから近代住宅が生まれてくる過程を具体的な地域に即して考える上で貴重な資料になるという。また、福村さんは建物から設計した隆俊像を「開明かつ合理的」と評価する。

### 右馬允の見学ポイント

- 1、現在の玄関は、側面だった → 構成としてめずらしい。
- 2、近代建築の歴史や時代ごとの趣向の変異を見る上で貴重な資料
- 3、農園経営から貨幣社会の変異のなかでの住居のありよう

地主（農）→酒蔵→旅館経営

4、大鹿村の屋根の仕様はなぜ「とんとんぶき」なのかの考察 「とんとんぶき」は板へぎに木の皮をのせ石を乗せた屋根。江戸時代くれきで財をなした集落で材木が豊かであったからこそ生まれた屋根の造りなのではないか。



集落のまちなみやたてものからかつての生活風景が見えてくるようで興味深かい一日だった。  
「あたりまえにそこにあるものじっくりと見ていく事」で新しい発見や知らなかつたことがどんどんでてくる不思議。「あたりまえ」の奥深さには毎回驚かされる。 (20/02/09記)

【告知】◆新作リニア反対商品 coming soon…「南アルプスの未来にリニアはいらない」～いもむし編～越路の表紙になつたいもむし達をハガキにしました。カラフルないもむし達のフォルムを楽しめる厳選7枚セット。2月下旬からリニア反対イベントや村内関係店舗で販売予定。◆3月29日相模原湖でリニアの排出土、言論弾圧事件についてご報告します。 詳細は別紙参照 村公認禁句本「南アルプスの未来にリニアはいらない」を販売予定。会いに来てね★